

フランス人、画家ピゴの絵

フランス人、ピゴという画家が、明治十五年正月に来日した。二十一歳であった。

彼は、日本の「浮世絵」の世界に憧れ、日本美術の真髄をじかに学びたいと決意して、やって来たが文明開化の明治社会は実に奇妙に写つたらしく、実に面白い明治の日本人の生態を描いたので、遠い明治を目前に見れると考えて、この稿を設けた。

「牧歌」と題して「明治二十年」



黒田清輝が明治二十三年に発表した、この絵に、当時の人は度肝を抜かれた、浮世絵には女性の裸体を描いたものはあるが、それでも腰巻くらいをしていたのが普通であったという。
フランス人にしては、当たり前前の絵を「えらいこっちゃ」と見物人が押し寄せたのは寧ろ、可笑しかったのであろう。